

地域に「いい仕事」をしろだす——働くことの回復——

●働くことの意味

一九八九年に『コージェネ電力革命』（ダイヤモンド社）を出版した。きつと、たくさん売れるだろうと考えていたら、ほとんど売れずに残部がたくさん出て廃棄処理されてしまった。原子力発電所があちこちで事故を起こし、市民の反対運動が盛り上がりつつあった時期である。

『コージェネ』とはコージェネレーションの略で、発電をしながら熱も取りだす簡単な装置。工場では電気だけでなく、ボイラーでお湯を沸かして熱を必要としている。

コージェネは工場で発電をして、発電の際に出た熱を捨てずに利用する。これだけでエネルギーコストが半分以下になる。発電機に熱回収装置をつけただけのものでも簡単な装置だ。燃料はガスでも重油でもよい。図（次ページ参照）のように、燃料を燃やしてエンジンを動かし発電機を回せば電気が起こる。熱はお湯や暖房などに使う。原子力発電所がいかに優れたものであっても発電効率は四〇％で、残りの六〇％は熱として捨てている。しかも、事故のときに被害者が少なくすむように田舎に建設されているため、長い距離を送電しなければならず、送電ロスも大きい（田舎に住む人を馬鹿にした話である！）。

一五年前は規制が厳しくてコージェネはわずかしかなかったが、いまでは各地のコージェネを総計すれば発電能力は二〇〇万KWを超える。一〇〇万KWの原子力発電所二基分である。

当時は電気事業法の規制が厳しくて、工場で自家発電をすることは法律でほぼ規制されていた。なぜなら、電力会社が独占的に発電、売電事業をして独占的な利益を得ていたため、新規の参入を拒んでいたからだ。

しかし、日本の企業は世界の企業と競争しなければならない。高いエネルギーコストは競争力を失う原因になる。そこで少しずつ電気事業法が規制緩和され、コージェネを設置することが可能になった。

『コージェネ電力革命』では、規制緩和を見越して、市民が協同組合方式で共同出資をしてマンションなどの地下室にコージェネを設置し、「安くて安全な電気」を販売することを提案した。「エネルギー生協研究会」という名称までつくって、いくつかの生協にエネルギー事業を進めたのだが、食べ物運動や原発運動に熱心でもエネルギーを自分たちでつくりだす事業には関心は示さなかった。原子力発電に反対する人たちが、次のエネルギーを求めて殺到すると思っただけで書いた本だったが、市民運動

の人たちはほとんど読んでくれなかった。

しかし、電力会社で働く人たちはひそかに読んで、沖縄電力から北海道電力まですべての電力会社の中堅の人たちが、出張のついでにと訪ねてきた。

彼らは異口同音に「札幌で住民のおおをなぐつて心を買うような原発建設の仕事はもうしたくない。未来につながるようなコジェネや自然エネルギーを仕事として取り組んでみたい」と語って、去っていった。

ちゃんと働きたい人がいるのだ！

本は売れなかったけど、そういう労働者との出会いが、わたしの励みになった。一方、市民運動は原発の事故が少なくなると、火が消えたようにおさまっていった。

その後、コジェネは着実に広がり事業として定着していった。反原発運動は原発を止めることはできなかったけれど、利益を求めた企業はコジェネを設置し続け、原発二基分に匹敵するコジェネが日本各地で効率よく動いている。そして、それを誇りにする労働者がいる。

● 自然エネルギーという仕事

「原子力は安い」ということで電力会社は原子力発電を進めてきたが、安い根拠は原子力のゴミであるプルトニウムや核廃棄物の処理費用を計算していなかったからである。計算できないから計上しない、というのは独占企業のエゴである。

しかし、電気事業法が緩和され、多くの企業が電気事業に参加できるようになったため、電気料金も下がりは

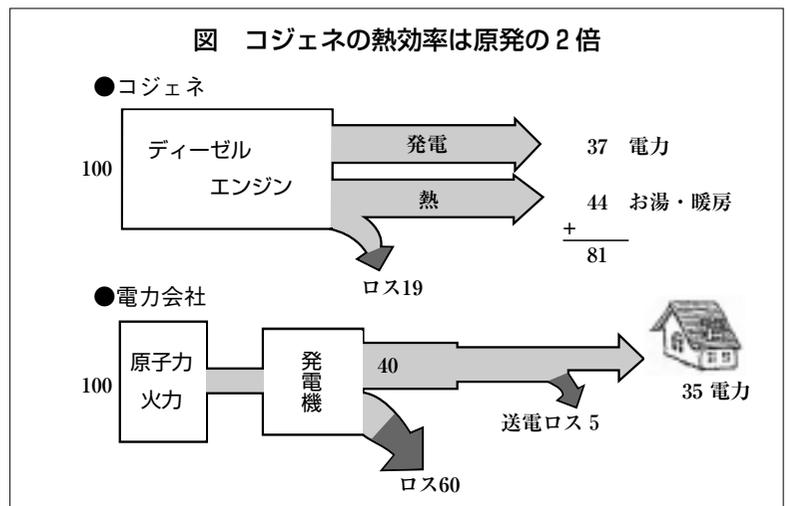
じめた。最近、電力会社は自ら、原発のゴミの処理費用を言いはじめている。もう数年で、最初に建設した原発を廃棄する。核のゴミ処理費用を電力会社が負担すれば電力会社は破産する。そこで、それを国民の税金で賄うために、「安い原発」という看板を捨てて、「原発でこの国は動いているのだから、そのゴミの処理費用に税金を出して」という戦略に変えたのである。

原発は安い、自然エネルギーは高いという迷信を電力会社はつくって、自然エネルギーの促進を妨害してきたが、自ら真実を白状してしまった。嘘をつき続けることはできないものだ。

コジェネの本を書いたころは、ヨーロッパでは自然エネルギー、風力発電産業が動きはじめていた。たとえば、当時のデンマークでは九九%が石油で発電していたが1%を風力で発電していた。そして、将来10%以上を賄う、という政府予測を発表していた。

10年以上たった今、こうした動きはさらに加速している。欧州風力エネルギー協会とグリーンピースの共同で行った地球規模の風力資源を評価する研究活動では、「2020年までに、全世界の必要な電力の12%を風力発電で賄うことができる」と試算結果を出した。20年までに全世界1231GWの風力発電が可能になり、そ

図 コジェネの熱効率は原発の2倍



出典：『コジェネ電力革命』より。

れにより一七九万人の雇用が創設され、機器製造コストも〇二年レベルから四〇%の削減が可能になるといふ。原発よりも安く、自然に負荷を与えないエネルギーを生み出す産業がヨーロッパでは着実に育っていた。

原発は一見安かったけど、核のゴミ処理費用が隠されていた。核のゴミで未来を閉ざすエネルギーでしかなかった。一方、自然エネルギーは、一見高そうだったが、その地域ごとの自然を利用してエネルギーを安く生みだしていた。雇用も生みだしていた。

輸出産業としての農業が、地球規模の物質循環を壊し、地域農業と地域の雇用を壊しているのと同じ構造が、エネルギー産業にも、かつてあった。そして、そのエネルギー産業では、その構造が変わろうとしている。原発ではなく、地域の自然に根づいたローカルなエネルギー産業が世界各地で動きだし、雇用と産業を生みだしている。残念ながら、日本は出遅れてしまった。

● 中村商店構想

目の前の資源や自然を食いつぶし、ゴミを捨てて逃げだせば、お金を儲けることは容易である。一方、足下の自然、地域の人々とうまく折り合いをつけてやっていく仕事では、大儲けは期待できない。環境の時代を迎え、奴隷からも、第三世界からも、女性からも、そして自然や未来からも奪うことが禁止されようとする今、奪うことでの大儲けは期待できない。

そうであるならば、地域に根づいてぼちぼち稼いでい

く仕事、労働、暮らしてよいのではないのか。地域を豊かにし、未来を豊かにし、自分自身も誇りをもつて働ける労働でよいのではないのか。ほとんどの人はそんな思いで働き、暮らしをたてている。ほんの一部の人だけが「もつと、もつと」と願っているにすぎないのに、いつのまにかそれに巻き込まれ、足下を見失っていただけではないか。

そんな思いでつくったのが「有限会社中村商店」である。(有)中村商店は、世界征服を行わないことを宣言する。地域に埋没し、地域を豊かにすることではちぼち稼がせてもらう。地域や家族、何よりも自分自身が誇りをもてる労働を行う。そういうものを「いい仕事」として、「いい仕事」を提案し広げていく。

これが(有)中村商店構想である。いまは国立大学の教官となつて副業が制限されているため、NPO法人地域循環研究所を立ち上げて、「いい仕事」の提案と普及を行っている。地域循環研究所の提案する「いい仕事」とは、自然エネルギー、有機物循環事業、地場産給食、子ども地域監査システム、環境コンサルティングなどである。四年目の今年、やっと単年度黒字になった。

社長は大変だけれど、仕事をつくるのはおもしろい。アイデアはいっぱいあって、それをいま形にしているところだ。地域で元気な老人を活用して、わたしなりの農産物直売所も三年後につくろうと思っている。

写真 福岡県大木町で実験中のバイオガスプラント。生ゴミからメタンガスというエネルギーを取り出すだけでなく、液肥も生みだして田んぼで利用する。



感想や意見は、下記まで。

osamu.nakamura@nifty.ne.jp
http://homepage3.nifty.com/osamu-nakamura/index.htm